

『篁物語』の解釈に関する諸問題

勝 俣 隆

Some Problems of the Interpretation of The Tale of TAKAMURA

Takshi KATSUMATA

はじめに

『篁物語』については、解釈上、まだ意味が不明な個所がかなり存在する。それは、伝本が少なく、原本に遡ることが困難な点が大きな理由である。この点に関しては、本学部の紀要第五十九号で、若干の問題について私見を述べてきた^{注1}。その後さらに、幾つかの解釈上の問題点について、新たな私案を考えたので、それを提示したいと考える。

一、妹が部屋に閉じ込められた後、篁が曹司に戻って食べ物を持っていく場面について

平野由紀子氏『小野篁集全釈』で該当部分を引用すれば、次のようになる^{注2}。

夜明けにければ、曹司に歸りて、この女食ひつべきやうに、物を返りてもていかんとするに、心まどひして、足もえ踏みたえず、もの覚えざりければ、むつまじう使ふ雑色を使にて、ただ今心地あしうて、え参り来ず。そのほど、これすぎ給へ。ためらひて参らむ。「女、穴のもとにて待つに、かく言ひたれば、たがためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとどめ取り入れず。歸りて、
「かくなむ」
と言ひければ、かしかうして、またまた行きて見れば、三四日ものも食はで、ものを思ひければ、いとくちをしう、息もせず。

右の引用部分で、傍線部「物を返りてもていかんとするに」は、何を言いたいのかわかりにくい場面である。様々な説があるが、従

来の説では、十分に納得できる説明とは言い難い面があった。そこで、本稿では、新たな解釈を提示することで、この場面をより理解しやすくしたいと考える。

当該場面について、先行論では、次のように解釈してきた。

(本文) この女くひつべきやうに、物をかへて持てゆかむとするに(現代語訳・注釈) たべる事が出来るやうに。かへて 彰「てかへて」「てうじて」の誤か。(宮田和一郎『校註篋物語』爾保布廻園、昭和十一年十二月)^(注5)

(本文) この女くひつきにやにものをてかへてゆかんとするに(注釈) くひつきやに 図「くひつへきやうに」、ものをてかへてもてゆかん(図)「ものを返てもていかん」(宮田和一郎『新校篋物語』爾保布廻園、昭和十一年十二月)^(注4)

(本文)「この女くひつ・きや・に、物をてかへて持てゆかむとするに、」(現代語訳) 図書寮本による。妹の食べられるやうに物を調理して持参しようとしたが(宮田和一郎『王朝三日記新釈』(健文社、昭和二十三年三月)^(注5)

(現代語訳) 女君が、たべることが出来るように、ものを調理して持って行くこととするのだが、(松尾聰『現代語訳 日本古典文学全集 更級日記・平中物語・篋物語・堤中納言物語』(河出書房、昭和三十一年十月)^(注6)

(本文) この女食ひつべきやうに、ものを調じて持て行かむとするに、(現代語訳) 食べることが出来るやうに(注解) 底本「くひつきやに」書陵部本によつた。底本「てかへて」誤写とみた。書陵部本「返て」(山岸徳平校注『日本古典全書 平中物語・

和泉式部日記・篋物語』朝日新聞社、昭和三十四年五月)^(注7)
(本文) この女食ひつべきやに、ものをてかへて、もてゆかんとするに、(現代語訳・注釈) 食うことのできるように。書陵部本「くひつべきやうに」とあるによる。調理して。「てうじて」の誤写か。(遠藤嘉基・松尾聰『日本古典文学大系 篋物語・平中物語・濱松中納言物語』(岩波書店、昭和三十九年五月)^(注8)

(現代語訳) 妹がたべることが出来るように、食物を調理して持っていこうとしたが、(頭注) ものをてかへて 物を返して(書)「てかへて」ハ「てうじて」カ(平林文雄編著『篋物語 総索引』(白帝社、昭和四十七年三月)^(注9)

(現代語訳) この女が食べることが出来るように、普段の食べ物と違ったものを持って行くことすると、(注解) 彰本は「ものをてかへて」とあり、『全書』は誤写とみて、「ものを調じて」と改め、『全集』はその訳語を「ものを調理して」とする。「大系」も「全書」と同じ意見で「手うじて」の誤写説。しかし、この場合二語以上にわたつて根拠のない誤写説を取っているの为首肯しがたい。むしろ「かへる」には、状態を変える、変わらせるの意があるゆえ、「てうじて」の誤写と考えなくても、物を「代ふ」「替ふ」(下二段・他動)が、取り替える、変えるの意があるので、女が特殊な状況にあるから普段と違った物、すなわち変わった食事を持って行くこととして、と解釈できる。『竹取物語』に「身をかへたるがごとくなりたり」とある。彰本の「てかへて」の「て」は接頭語と考える。(石原昭平・根本敬三・津本信博『篋物語新講』(武蔵野書院、昭和五十二

年五月(注¹⁰)

(現代語訳) 食べ物を用意して、持って行くこととすると。……
(語釈) 物を返りてもていかむ 『新講B』は、「ものをかへて」と読み、「変った食事を持って行くこととした」と解すが、用例は示されていない。諸注は『全書』の解、すなわち彰本「ものをてかへて」を、「てうじて」(調じて)の誤写とみる説をとる。
(平野由紀子『小野篁集全釈』(風間書房、昭和六十三年三月)
(注¹¹)

(本文) この女食ひつべきやうに、ものをてうじて持ちて行かんとするに、(現代語訳)「妹が食べることができるよう、食物を調理して持って行くこととしたが」(平林文雄『増補改訂小野篁集・篁物語の研究』(和泉書院、平成十三年六月)(注¹²)

右のように、先行論では、「女(妹)が食べられるように、いつもと変わった食事を持って行くこととする」とか、「女(妹)が食べられるように食物を調理して持って行く」という訳がなされている。これは、『篁物語』の伝本である彰考館甲本・乙本のいずれにも「ものをてかへて」とある本文を取り、「てかへて」を「手を変えて」の意味に取れば、「いつもと違った料理にして」の意味となり、「てかへて」を「てうじて」(調じて)の誤写とみなせば、「食物を料理して」の意味になるという理解に基づいていると推測される。

しかしながら、この場面は、篁が曹司に戻って、妹に食べ物を持って行くこととする場面である。これを伝本ごとにまとめて示せば、次のようになる。

承空本 ヨアケニケレハサウシニ帰りテコノヲンナクヒツヘキ
ヤウニ物ヲ返テモテイカントスルニ
書陵部蔵本 よあけにければさうに帰りにてのをんなくひつべきやうに物を返てもていかんとするに
彰考館甲本 よあけにければさうしにかへりてこの女くひつきやにものをてかへてもてゆかんとするに
彰考館乙本 夜あけにければさうしにかへりてこの女くひつきやにものをてかへてもてゆかんとするに

現存四本を比べれば、承空本と書陵部蔵本、彰考館甲本と彰考館乙本がそれぞれ似ていることは明らかである。また、補入記号の有無などからも、既に指摘されているように、承空本が書陵部蔵本の親本の存在であって、より良い本文を有している可能性が高いことも首肯できる(注¹²)。

しかしながら、この四本とも、原本からは既に変形した伝本であることは確かであろう。それは、四本のいずれにしても、文意が不明のところが多く存在するところから判断できるところである。

特に問題の部分は、「物ヲ返テ」「物を返て」「ものをてかへて」とある部分である。「物ヲ返テ」では意味をなさぬし、「ものをてかへて」も不自然な日本語である。先行論は、それを「手を変えて」と解したり、「てうじて」(調じて)の誤写だとしてきた。「手を変えて」という解釈は、「女(妹)が閉じ込められ、食事もままならぬ状態なので、普段と異なる特別な食べ物を用意して」と解釈しているようである。また、「調じて」の場合は、「料理をして食べ物を用意して」という意味に解していると思われる。しかしながら、そも

そも、篁が曹司に帰って「特別な食べ物を用意」したり、「料理する」ということがありうるのであるろうか。曹司はあくまで勉学と就寝の場であって、調理をする場ではなからう。そもそも台所や調理をする水回りが曹司に備わっているとは到底考え難い。勿論、曹司にはまったく食べ物が存在しないわけではなく、果物や保存のきく菓子類等は置いてあった可能性はある。

『篁物語』自体に、篁が大学の宴会に出された橘の実を懐に入れて妹のために持って帰る場面が見られる。

春のことにやありけむ。ものも食はで、花柑子・橘をなむ、願ひける。知らぬほどは、親求めて食はず。兄、大学の饗応するに、「みな取らまほし」と思ひけれど、二つ三つばかり、たとう紙に入れてとらず。

これは、『二十四孝』の「陸績」の話で、母親のために、橘を三つ懐に入れて持ち帰ろうとした六歳の子であった陸績の故事と関係があるようだ。

陸績、六歳の時、袁術といふ所へ行侍り。袁術陸績がために、菓子に橘を出せり。陸績これを三つ取りて、袖に入れて帰るとて、袁術に礼をいたすとて、袂より落せり。袁術これを見て、「陸紡績殿は、幼き人に似あはぬこと」と、いひ侍りければ、「あまりに見事なる程に、家に帰り母に与へんためなり」と申し侍り。

右は、御伽草子の中の「二十四孝」であって、室町時代に下るが、原典としての中国の「二十四孝」は、晩唐以前の成立の可能性が指摘されているから、『篁物語』が、「二十四孝」の影響下に成立した

可能性は十分にあるろう¹⁴⁾。

そうした、篁物語の典拠としても興味深いのが、これも、中国でも日本でも、果実などの入手は、そうした宴会などが機会であって、現在のように、すぐに店で購入できるものではなかったことを示そう。

この場面でも、柑子のよつな果物類が、篁の曹司に保存してあり、それを妹に持って行こうとした可能性はあるろう。つまり、篁の曹司にあった食べ物は、果物や干菓子のようなもので、料理などをする類のものとは考えにくいのである。従って、「特別な食べ物を用意」したり、「料理する」ということは不可能であったと理解すべきでないか。つまり、篁が妹に持って行こうとしたのは、何も特別に手を加える必要のない果物や干菓子など以外はあり得ないということである。このことから何が分かるかと言えば、「手変えて」や「調じて」と解して、篁が料理等で特別な食べ物を作るという解釈は誤りである可能性が高いということである。

それでは、どう理解すればよいのか、次にそれを考えたい。もう一度、伝本四本を眺めてみたい。問題箇所は、次の部分である。

承空本 クヒツヘキヤウニ物ヲ返テモテイカントスルニ

書陵部蔵本 くひつへきやうに物を返てもていかんとするに

彰考館甲本 くひつきやにものをてかへてもてゆかんとするに

彰考館乙本 くひつきやにものをてかへてもてゆかんとするに

先ず、彰考館甲本・乙本の「くひつきやに」は、承空本・書陵部蔵本の「クヒツヘキヤウニ（くひつへきやうに）」と比較して、「くひつへきやうに（食ひつへきやうに）」の方が文意が良く通らう。次に、承空本と書陵部蔵本の「物ヲ返テ（物を返て）」も彰考館甲本・乙本の「ものをてかへて」も意味が不明な部分である。

そして、その下の、承空本と書陵部蔵本の「モテイカントスルニ（もていかんとするに）」、彰考館甲本・乙本の「もてゆかんとするに」のどちらも、「持つていこうとする」との意味で理解できる。

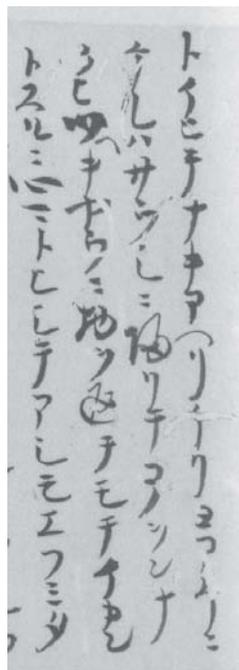
結局、その間の部分である承空本と書陵部蔵本の「物ヲ返テ（物を返て）」、彰考館甲本・乙本の「ものをてかへて」の文意が不明であるのは、何らかの誤写があると見做すべきであろう。現在の文献学的な見地からよれば、承空本が現存諸本の中では、最も古態を伝えている可能性が高いとされるので、四本の中では、先ず尊重されるべき本文とすべきだろう。そこで、承空本と書陵部蔵本の「物ヲ返テ（物を返て）」がより古態に近いという前提で考えてみたい。「物ヲ返テ（物を返て）」が古形を伝えているとしても、そのままでは意味が通らないから、そこには誤写があると見るべきだろう。その可能性が最も高いのは「返」の字であろう。それでは、「返」は、何の漢字の誤写であろうか。

そのために、この前後の文脈から、考えてみたい。この場面は、承空本によれば、「物ヲ返テ」とあって、「篁が夜が明けたので、自分の曹司に帰って、この女（妹）が食べることをできるよう」に、『物ヲ返テ』持つていこうとするに「となる。この「物ヲ返テ」の「返」が間違いで、「物ヲ」の」の部分に何か別の漢字が入るとしたら、何が入るであろうか。

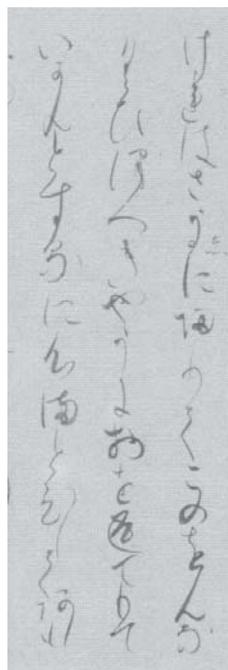
「曹司に帰ること」と「（曹司）から持つて行く」の間に、「物ヲテ」が入ることになる。「物」は、「食べ物」であるから、「曹司に帰って、食べ物を」て、それを曹司から持つて行った」という意味になる。この」の中に何の漢字が入るかは、状況から判断できよう。曹司に帰るまでは、手に持つことはなく、曹司に帰ってから食べ物を手に持ったのだから、その間に食べ物を手に持ったことになる。つまり、「物ヲ」の中には、「得」「持」「取」などの「手に持つ」という趣旨の言葉が入らう。すく下に、「持て行かん」とするに「とあるから、上に同じ言葉は来ないから、「持」は除かれる。「得」は、自分の物でない物を自分のものとする意味だから、これも除かれる。そうすると、「取」が入る可能性が高い。つまり、ここは、本来、「ヨアケニケレハサウシニ帰りテコノランナクヒツヘキヤウニ物ヲ取テモテイカントスルニ」と本文があったのではないか。「返」は「取」の誤写であった可能性が出て来る。

実際、「返」の崩し字と「取」の崩し字は、よく似た字体があり、誤写・誤読する可能性は高いのである。

承空本の該当部分

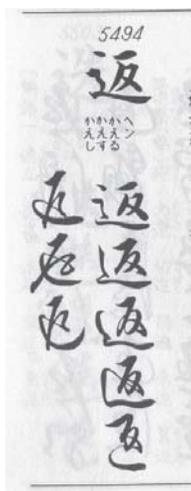


宮内庁書陵部蔵本の該当部分

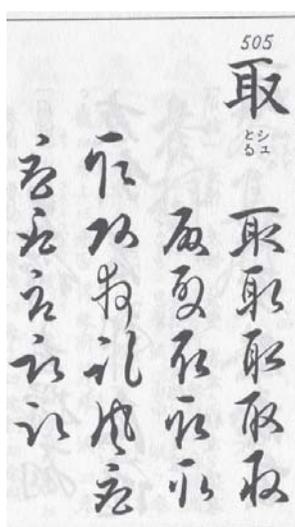


の「返」の漢字が誤写である。

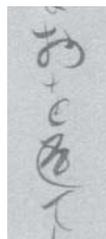
「返」の字の草体は、次のようである。



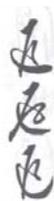
「取」の字の草体は、次のようである。「返」の草体に類似している。



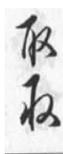
(承空本)



(書陵部蔵本)



(「返」の草体)



(「取」の草体)

このように考えれば、当該部分は、篁が妹のために食べ物を探しに曹司に帰り、曹司にあった適当な食べ物を手にとって、持って行くこうとする場面と言えよう。適当な食べ物とは、先に述べたように、果物や干菓子など、保存の効き、調理の不要な手軽な食べ物であった可能性が高い。以上のように解釈すれば、従来の調理などをするといった無理な解釈はしなくて済むのである。

二、 篁の曹司はどこにあるか

高橋諒氏は、御論考の中で、物語に登場する篁の居住する「曹司」が大学寮の文章寮の中にあるという見解を示されている(注16)。

『篁物語』は、小野篁の学生時代の、九世紀前半を忠実に描写しており、その限りにおいて、『篁物語』の「曹司」の記述は文章院曹司であると解することができる。

一つの考えとしては興味深いが、『篁物語』本文の内容と照らし合わせて考えると、篁の曹司が大学寮の中にあるという見解には無理が伴うと思う。筆者の考えでは、篁の曹司は、実父、並びに、腹違いの妹が住んでいる寝殿造りの御殿の敷地内の離れのような場所にあつて、邸宅の外にあるとは考え難い。以下、その理由を述べてみたい。

恋敵の兵衛佐が妹に手紙を渡そうとする場面は、次のようにある。

この佐、人をつけて、「いづくにか率て去ぬる」と見せければ、「その家」と見てけり。

あしたに文あり。「神の教へしかばなむ、さして奉る。かの石神の御もとにて、今日あらば」。文を取り入れて見れば、この兄、出で走りに、「父ぬしも聞き給ふに、いともの騒がしく。この童は、いづくから来たるぞ。いづれの好き者の使ぞ。」と言ひければ、「御文は、奉らせつれど、昨日いませしぬしの『いづれの使ぞ』とのたまふを、うちからは、翁びたる声にて、『何事ぞ』など、のたまひつれば、わづらはしきになむ、まうで来ぬる」と言ひければ、「たづめの童」と言ひて、またのあしたに、「昨日の御返し、たびたび、いとおぼつかなし。この童の、あとはかなくて、まうで来にししかば

あとはかもなくやなりにし浜千鳥おぼつかなみにさはぐ心か

この兄、大学に出にけり。樋洗童、取り入れて奉る。「文をも取り、大学のぬしもぞ見つくる、近からむ人の家に据ゑよ」

とて、「昨日も見しかば、いさや

たまほこの道交ひなりし君なればあとはかなくもなると
しらすや」

この場面で、篁の行動に注意してみると、一度目は、朝に兵衛佐からの手紙を妹が見ていると、篁が出てきて、妹が返事を渡す前に兵衛佐からの使いの童を追い返してしまふ。二度目は、翌朝、再びやってきた兵衛佐の使いの童は、篁が大学へ出かけて後に、妹の召使いの樋洗童に手紙を渡す。妹は、篁がその使いの童を見つけるのを恐れて、樋洗童に対して、兵衛佐の使いの童を近くの家に待たせておくように指示する。ここから分かることは、篁が普段、妹の住む屋敷に同居していて、大学へはそこから通い、そこに居住しているので、妹のところへ使いの者が来ればそれを発見できる状況にあるということである。また、篁が妹の屋敷に住んでいるからこそ、大学へ行けば、篁が屋敷には不在と言う状況が生まれることも分かる。今は、大学へ行っていて不在でも、講義が終われば、いつ帰ってくるかも知れないから、妹は篁が大学から帰ってきて、兵衛佐の使いの童を発見することを恐れているのだと分かる。「大学へ出にけり」を家庭教師が終わって文章寮の曹司に帰ると解するなら、もう明日まで戻ってくる心配はない訳だから、使いの童を近所に待たせる必要もなかる。篁は、大学寮に住んでいるのではなく、大学へは、妹の屋敷から通っているから、妹の気遣いの表現があると推測される。そもそも「大学へ出にけり」は、現在でも出勤という言葉があるように、居住する場所から目的地へ所要で出かける場合に使う言葉で、帰宅する時に使う言葉ではない。ここでは、大学での

講義に出席するために、妹の邸宅の中にある自分の曹司を出たという意味に解すべきであろう。

また、曹司が登場する場面は、他にもある。

篁と妹が師走の十五日ごろの月夜で語り合う場面である。

師走の十五日ごろ、月いとあかきに、物語りしけるを、人見て、「誰ぞ、あなすさまじ、師走の月夜ともあるかな」と言ひければ、

春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける返し

む 年を経てももひも飽かじこの月はみそかの人やあはれと思は

かく言ふ程に、夜ふけにければ、「人うたて見むもの」とて入りにけり。男は、曹司に、とみにも入らで、うそぶきありきけり。

さて、あしたに、久しう書読ませざりければ、父ぬし、「あやしう篁が見えぬかな」と言ひて、呼びにやるに、おどろきて、例の書かき集めて教へけるままになむ、この女のみ心に入りて、ひがことをのみなむ、しける。

この場面は、篁と妹の間が、だんだんと親しくなっていく場面、妹の返歌に喜んで、興奮した篁が、妹が自分の部屋に入ったあと、もうれしくてたまらず、自分の曹司にはすぐに入らずに、寝殿造りの邸内を歩き回って、詩歌を吟じている場面である。すぐに自分の曹司に入らずに、邸内を夜遅くまで歩き回っていたために、夜更かしをしてしまい、翌朝、家庭教師の時間になっても寝坊してやって来

ず、父親の使いから起こされる場面が存在するのである。この点については、既に拙稿で論じたので、それを見ていただきたいが、「男は、曹司に、とみにも入らで」とある点が、この曹司が、妹が住む邸宅と同じ寝殿造りの中にあることを如実に示している¹⁶⁾。

この邸宅とは全く別の、大学寮の文章院の曹司であれば、「入らで」という表現をはずがない。「入る」は、現在居る場所から、直接に出入りが可能な空間に入る場合に使うことばであって、一度邸宅を出て、かなり歩いて行って、そのあとで、離れた場所に入ることなどを意味することは、日本語の用法としては、あり得ないからである。

もう一か所の曹司は、一で扱った、篁が妹に食べ物を持つていく場面であって、これも、邸内の離れであるから、すぐに対応ができるのであり、遠く離れた大学寮まで食べ物を取りに行くなどということは考え難いであろう。

高橋氏は、「よって普段は、日中は家庭教師として妹の家に通い、夜は大学寮の文章院、紀伝道曹司に設けられた勉強室に戻っていたと考えられる。」としているが、純粹に昼間の家庭教師しか妹と関係をもたないのが原則ならば、夜遅くまで月見をするなどの行為の存在は、いかに説明するのであるうか。

「大学のぬしをば、家の中に、な入れそ」とて追ひければ、曹司にもり居て、泣きけり。妹のこもりたる所に行きて、見れば、壁の穴のいささかありけるをくじりて、「ここもとに寄り給へ」と呼び寄せて、物語りして泣き居りて、……

とある部分にも曹司が出て来る。ここで、「家の中に、な入れそ」とある部分は、高橋氏の如く、邸宅の外へ追い出したという見方も不可能ではない。しかし、それでは、それに引き続いて、篁が、妹が込められた場所に行つて、妹と物語をする場面の存在が不自然となる。邸宅から完全にシャットアウトされてしまえば、忍んで近くことは困難になると考えられるからである。この場合の「大学のぬしをば、家の中に、な入れそ」も、寢殿造りの邸宅の中の妹や父親・継母が住んでいる居住空間の中に篁を入れるな、という意味に理解すべきであろう。篁の曹司は、別棟の離れであるから、そこからも追い出すという意味ではあるまい。だからこそ、夜更けに忍んで妹に逢いにいけるのである。

以上の考察から、篁物語の篁の居住する曹司は、大学寮の文章院曹司ではなく、妹と生活空間を一にする両者の父親の寢殿造りの邸宅の中に離れとして用意された部屋であると理解すべきであろう。

三、妹の稲荷詣について

妹の初午の稲荷詣での場面も問題のある個所である。

さて、この女、願ありて、二月の初午に、稲荷にまゐりにけり。供に人多くもあらで、大人二人、わらは二人ぞありける。おとなは、いろいろの袿、二人は同じをなむ、着たりける。君は、綾の搔練の単襲、唐の羅の桜色の細長着て、花染の綾の細長折りてぞ、着たりける。髪はうるはしくして、たけに一尺ばかりあまりて、頭つきいと清げなり。顔もあやしう世人には似

ず、めでたうなむありける。男の童三四人、さては、この兄とぞ、ありける。まほにはあらねど、先立ちおくれて来ける。まうでさまに、困じにければ、兄いとほしがりて、「篁にかかり給へ」とて寄りければ、「いで、いないな」といひて、道中に去にけり。

さる程に、兵衛佐ばかりの人、かたち清げにて、年二十ばかりなりけるが、詣であひて、かへさに、女の道にゐたる、「あな苦し。かくてやは出で立ち給へる」もの妬みして、男申すに、「かもは車つくりて、乗せ奉りて、このわたりなる、きさきのみねにすゑ奉らむ。女の身にはだいわう、みかどには誰をか」と言う程に、暮れにければ、破子さがして食はせむとするに、この佐をやりすぐす。この男、休むやうにて、降りて、

人しれず心ただすの神ならば思ふ心をそらに知らなむ
返し

やしるにもまだきねすゑす石神は知ることかたし人の心を
またおこせけれど、この兄、いそがして、車に乗せて、率て
去ぬ。

この部分には、幾つかの問題点がある。

- 第一に、妹は何のために初午に稲荷詣でをしたのか。
 - 第二に、どういう手段で、稲荷へ出かけたのか。徒歩か牛車か。
 - 第三に、妹は、本当に、稲荷詣でを完遂できたのかどうか。
 - 第四に、「かもは車」とは何かということ。
- などである。
- 分かり易い第二の点から述べたい。

平野氏は、

当時の貴族の女性の場合は、車(牛車)でゆく場合もあつたが、一行は徒歩である。歩いてゆく物語といえば、源氏物語の玉鬘の初瀬詣が思いあわされる。

としている^(注17)。

確かに、前半の稲荷詣での部分だけ読むと、主人公の妹も徒歩で出掛けているような印象がある。しかし、『篁物語』の稲荷詣での末尾では、

「またおこせけれど、この兄、いそがして、車に乗せて、率て去ぬ。」とあつて、篁が妹を牛車に乗せて屋敷へ急いで帰宅させる様子が描かれている。これから判断して明らかに、妹は牛車で稲荷へ参詣しているのである。勿論、稲荷の中社へは、坂道を徒歩で登らないといけないので、途中からは徒歩となるが、麓までは、間違いなく牛車で出かけていると見做すべきであらう。

従つて、「供に人多くもあらで」は、稲荷に牛車で着いた後、牛車から降りて坂道を徒歩で登る場面を描いたものと理解すべきである。

妹が坂道の途中で疲れてしまつのは、屋敷からずっと歩いてきたからではなくて、か弱い女性が、稲荷の急な坂道を登るのは、体力的に厳しいものだったからであらう。これをよく表わすのが、清少納言の枕草子である。清少納言は、「うらやましげなるもの」の中で、次のように述べている。

稲荷に思ひおこしてまつでたるに、中の御社のほど、わりな

くくるしきを、念じのぼるに、いささかくるしげもなく、おくれて来とみる者どももの、ただ行きに先に立ちてまつづる、いとめでたし。二月午の日の暁にいそぎしかど、坂のなからばかりあゆみしかば、巳の時ばかりになりにつり。やうやう暑くさへなりて、まことにわびしくて、など、かからでよき日もあらんものを、なにしに詣でつらんとまで、涙もおちてやすみ困するに、四十余りばかりなる女の、壺装束などにはあらで、ただひきはこえたるが、「まろは七度詣でし侍るぞ。三度は詣でぬ。いま四度はことにもあらず。また末に下向しぬべし」と、道にあひたる人につちいひて下りいきしこそ、ただなる所には目にもとまるまじきにこれが身にただ今ならばやおほえしか。

清少納言は、途中で「涙もおちてやすみ困する」といった悲惨な状態に陥るが、四十余りの女が七度詣でをしているのを目の当りにし、その体力差に驚き呆れ、普段なら目にも止まらない、その女性の身になりたいと羨望のまなざしで眺めているのである。宮中や貴族の屋敷で過ごしていて、ほとんど体を動かさない女性たちにとっては、長距離を歩いていなくても、牛車などの乗り物に乗らずに、急坂を歩いて登ったりすることは、きつすぎる運動だったのであらう。

いずれにせよ、牛車での稲荷詣であるのは動かないところであると考える。

次に、妹は、本当に、稲荷詣でを完遂できたのかどうかという問題を考えてみたい。

『篁物語』の本文では、「まつでさまに、困じにければ」とあって、まだお参りが完遂できていない時点で、既に「困じにければ」という状態である。その後、「かもは車つくりて、乗せ奉りて、このわたりなる、きさきのみねにすゑ奉らむ。女の身にはたいわう、みかどには誰をかと」言う程に、暮れにければ、破子さがして食はせむとするに、「この佐をやりすぐす。」とあって、兵衛佐が、妹に言いよつてきたすぐ後に、日が暮れてしまって、篁は妹に食事をさせよつとする。そのあと、篁はそのまま妹を邸宅へ連れ帰るのだから、結局、妹は稲荷詣でを完遂していないと見るべきだろう。

次に、「かもは車」とは何かということについて、考えたい。これについては、まず、四つの伝本を比較してみたい。

承空本 カシハクルマツクリテノセタテマツリテ、コノワタリナル
キサキノミネニスエタテマツラム。女ノ事ニハタイワウ、サカトニ
ハタレヲカト

書陵部蔵本 かもは車つくりてのせたてまつりて、このわたりなる
きさきのみねに、すゑたてまつらむ。女の事にはたいわう、さかと
には、たれをかと、

彰考館甲本 かしは車つくりて、このわたりなる木さきの屏にすへ
たてまつらん。女の身には大王、みかどにはたれをかと

彰考館乙本 かしは車つくりて……このわたりなる木さきの屏

にすへたてまつらん。女の身には大王、みかどにはたれをかと

ここで、「カシ八車」「かもは車」「かしは車」「かしは車」とある部分を、どう理解すれば良いか、考えてみたい。「かしは車」「かもは車」のいずれも、このままでは、意味が通らないから、何らかの誤写があるだろう。

そこで、発想を変えて、そもそも車(牛車)には、どついつ種類があるか、確認してみたい。

牛車の名称としては、次のようなものがある。

唐車(からぐるま) 唐廂(庇)車(からびさしのくるま) 雨眉車
(あままゆのくるま) とも言う。

糸毛車(いとげくるま)

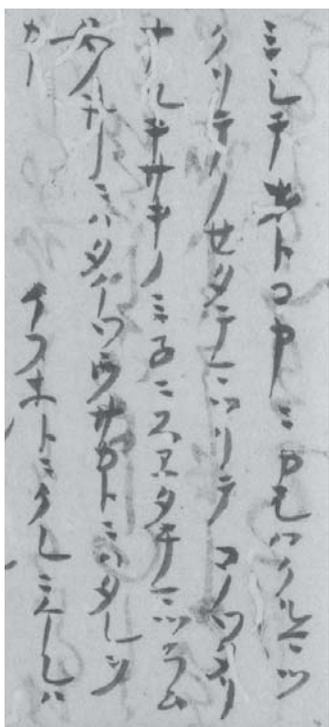
半部車(はじとみぐるま)

檳榔毛車(びろうげのくるま)

網代車(あじろぐるま) 八葉車(はちようくるま) 文車(もんぐるま) 等の種類がある。

右のように、種々の名称があるが、当該部分が三文字分あることからすれば、糸毛車(いとげくるま)と網代車(あじろぐるま)が該当する。次に、どちらが適切か考える上で、承空本の片仮名表記が注目される。従来、平仮名の表記からは、なかなか何の間違いか判定しにくかったが、承空本のカタカナ表記は、そのもとの形を推測せしめるものを有するのである。

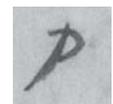
承空本には、次のようにある。



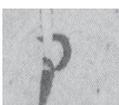
この「カシハ車」の「カ」は、カタカナの「ア」と酷似し、「シ」はそのまま、「ハ」も「ロ」と似ている。例えば、この承空本の中の表記では、次のものと比較してみれば、分かる事である。



カ



ア



ハ



ロ



つまり、「アシロ」は「カシハ」に変わり得よう。

なお、書陵部蔵本の「かもは車」は、承空本の「カシハクルマ」の「シ」が「モ」に似ていることから来た誤読であろう。

枕草子には、網代くるまについて、次のようにある。(注18)

檳榔毛はのどかにやりたる。いそぎたるはわろく見ゆ。網代ははしらせたる。人の門の前などよりわたりたるを、ふと見やるほどもなく過ぎて、供の人はかりはしるを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しくゆくはいとわろし(三十二段)。

網代は、檳榔毛に比べ、格式が低く、四位・五位が常用するものだが、遠出や略儀では、撰閨も乗る。

ここでも、「コノワタリナル、キサキノミネニ、スエタテマツラム」とあって、後の峰に据えるという内容なので、貴人の遠出用の車としては、不自然ではない。

従つて、本来は、「アシロクルマ【網代車】」とあつたのを、承空本では、「カシハクルマ」と書き誤つた可能性を指摘できよう。

つまり、この場面は、兵衛佐が妹に対して、「アシロクルマツクリテソタテマツリテ、コノワタリナル、キサキノミネニスエタテマツラム。」と言つていたのであつて、あなたのために網代車を造つてお乗せして、この近くにある「後の峰」というところにお供えしましょう。」となり、あなたを后にしたいという意味と取れる。後半は、承空本の「女ノ事ニハタイワウ、サカトニハタレヲカト」は意味不明なので、彰考館甲本・乙本の「女の身には大王、みかたにはたれをか」とある本文を採用すべきであろう。恐らく、彰考本甲本・乙本は、当該部分については承空本より良い本文を伝えていよう。即ち、妹を后、自らを大王になぞらえて、兵衛佐は、妹の歡心を買おうとしたと思われる。

次に、なぜ妹は初午に稲荷詣でをしたのかを考えてみたい。妹は、急に初午の稲荷詣でを決行する。ここで「願あり」という妹の願とは何なのか。

この点に関して湯浅幸代氏は、次のように論じられる(注19)。

この稲荷詣でが、特に女性の真摯で切実な願いや高い志を表すことを考慮するなら、後に異母妹が篁と契つて妊娠し自死することは、大いなる挫折と言えるだろう。異母妹の願いが叶つていけば、稲荷詣での段は、間違いなくは彼女を苦難から救つた靈験譚として位置づけられていたはずである。

確かに慧眼と言つべき論で興味深い。しかしながら、氏が、色好

みの代表としての平貞文が稲荷で詠んだ歌

稲荷にまうで逢ひて侍ける女の、物言ひかけ侍けれど、いらへもし侍らざりければ 平 定文

稲荷山社の数を人問はばつれなき人をみつと答へむ(拾遺和歌集卷十九・雑恋 一一一一)

を、篁物語との関係で捉えるならば、少し別の解釈も可能でなからうか。平の貞文が兵衛佐であつたことからすれば、平定(貞)文が、『篁物語』の兵衛佐のモデルになつてゐる可能性は高い。しかし、拾遺和歌集にあるように返歌をしても、女は、平定文の求愛をはねつけている。

妹の願掛けが、良い結婚相手との出会いであつたとしても、結局、兵衛佐との結婚は、最初から、拒否されるべきものであつたことにならう。確かに、妹の願掛けの自身は、良い結婚相手との出逢いであつた可能性はある。しかし、それは、篁を考慮せずに、全くの白紙の状態での結婚相手探してあつたらうか。稲荷詣でに行く前に既に、妹は篁に対して、心がかなり傾いていたと考えられる。従つて、稲荷詣でを通して良い結婚相手を探すというよりは、本当に篁で良いのか、その確認に出かけたという方が、本文の内容に即しているのではなからうか。

そして、妹が稲荷詣でを完遂せずに、坂道を上る前に苦しがつて休憩しているうちに、「兵衛佐ばかりの人」に出遭い、歌の贈答をする。

妹が兵衛佐の歌に対して返歌をしたのは、別に兵衛佐に対して気持ちが悪く動いたからではなからう。ただ、稲荷詣でに来ているので、稲荷社への参詣が済んだか否かは別として、ひよつとしたら、兵衛

佐との出遣いは、稲荷社の御神託ではないかという気持ちを抱いた可能性はあろう。しかし、二人が歌の贈答をするのを、篁が嫉妬して、「車に乗せて、率て去ぬ」とあるため、兵衛佐との関係も深まらなかったことになる。

いずれにせよ、湯浅氏の指摘されるように、稲荷詣でが成就できなかったから、妹は不幸になってしまったという見方は疑問である。稲荷詣の如何に拘わらず、妹は篁と結ばれる運命にあったのであり、それは、妹にとつて幸せであつたと見做すべきでないか。なぜかと言えば、仮に兵衛佐と結ばれたとしても、色好みの兵衛佐は、妹を篁ほどには大事にしなかつた可能性が高く、妹が幸せになつたと言ふ保証はないからである。一婦多妻制の時代に、妹が亡くなつてからも、三年間も長い間、妹の幽霊と共に過ごすというのは、並大抵の愛情ではできないことである。たとえ幽冥界をさまようことになつても、篁の愛情の純粹さから見て、二人の純愛という点では、妹は篁と結ばれて幸せであつたのではないか。

その点から言えば、初午の稲荷詣での趣旨は、やはり妹が篁を結婚相手とすることをかなり前向きに考えながらも、本当にそれで良いかどうかを稲荷の神託に任せようとしたと理解すべきではないか。篁の愛の確認という意味からは、かたき相手の登場はむしろ都合と言つて面を執とう。そのことで、どちらの愛が本物かを確かめることが出来るからである。そのため、兵衛佐の求愛に対して、妹は、ひよっとしたら、稲荷の御神託は、兵衛佐との結婚ではないかと考え、無下に退けることはせず、一度は、兵衛佐の使いを篁に見つかからないように、近くの家に隠して置くというような行動にさえ出たのではないか。しかしながら、篁の策略で、兵衛佐の使いは追い

返されてしまい、結局、兵衛佐からの求愛の手紙も絶えてしまったので、妹は、それが、稲荷の御神託で、自分は篁と結ばれるべきだと最終的に考えたのであろう。

つまり、篁への愛は、妹の中に、師走の月夜の日以来、間違いない芽生えていたが、それを確かめるべく稲荷詣でを実行し、結局は、兵衛佐という篁の対抗馬が退けられたことで、篁との愛を貫こうと決意したのだと考える。二人の純愛を、母親が認めず、引き裂いたのは、母親としては、将来どうなるかも分からない身分のまだ低い篁ではなく、妹に漢籍の教養を身に付けさせ、内侍にさせ、もっと身分の高い確かな人と結婚させたかつたからであろう。確かに、暗い部屋に閉じ込められ餓死してしまう妹の様子は、その点だけみれば不幸だと言えないことはない。しかし、亡くなって幽霊になつてからも、篁から愛され続けた妹は、純愛という点からは幸せな愛を貰いたと言えるのでなからうか。

篁物語の解釈はいろいろと難しい面があるが、今回は、そうした点を指摘しておきたいと考える。

注

- (1) 拙稿『篁物語』に関する若干の考察(長崎大学教育学部 人文科学 第五十九号、平成十一年六月)。
- (2) 平野由紀子『小野篁集全釈』(風間書房、昭和六十三年三月)。
- (3) 宮田和一郎『校註篁物語』(爾保布廼園、昭和十一年十二月)。
- (4) 宮田和一郎『新校篁物語』(爾保布廼園、昭和十一年十二月)。
- (5) 宮田和一郎『王朝三日記新釈』(健文社、昭和二十三年三月)。
- (6) 松尾聰『現代語訳 日本古典文学全集 更級日記・平中物語』

- ・篁物語・堤中納言物語』(河出書房、昭和三十一年十月)
- (7) 山岸徳平校注『日本古典全書 平中物語・和泉式部日記・篁物語』朝日新聞社、昭和三十四年五月)
- (8) 遠藤嘉基・松尾聡『日本古典文学大系篁物語・平中物語・濱松中納言物語』(岩波書店、昭和三十九年五月)
- (9) 平林文雄編著『篁物語総索引』(白帝社、昭和四十七年三月)
- (10) (石原昭平・根本敬三・津本信博『篁物語新講』(武蔵野書院、昭和五十二年五月)
- (11) 平野由紀子『小野篁集全釈』(風間書房、昭和六十三年三月)
- (12) 平林文雄『増補改訂 小野篁集・篁物語の研究』(和泉書院、平成十三年六月)
- (13) 安倍清哉『『篁物語』承空本(『小野篁集』)に関する研究課題』『人文』第7号、学習院大学人文科学研究所、平成二十一年三月)
- (14) 引用は、市古貞次校注『日本古典文学大系 御伽草子』(岩波書店、昭和三十三年七月)に拠る。なお、近藤春雄氏の『中国学芸大事典』(大修館書店、昭和五十三年十月)では、「二十四孝押座文が敦煌から発見されて、その作者の円鑑大師雲辯(唐末五代の人、五代後周の広順元九五一年歿)といふのからは、あるいは晩唐以前の作とも考えられる。」としている。納得できよう。
- (15) 高橋諒『『篁物語』の歴史認識』『曹司』を中心に、『三田國文』五十六号、二〇二二年二月)。
- (16) 注1に同じ。
- (17) 注(11)に同じ。
- (18) 引用は、池田龜鑑・岸上慎一・秋山虔校注『日本古典文学大系 枕草子・紫式部日記』(岩波書店、昭和三十三年九月)
- (19) 湯浅幸代『『篁物語』と継子譚 書読む女の悲劇』(『駒沢国文』四七号、平成二二年二月)
- (補注1) 承空本については、安倍清哉『『篁物語』承空本(『小野篁集』)に関する研究課題』、『人文』第7号、平成二二年三月、学習院大学人文科学研究所)を参考とし、本文の転載は、冷泉家時雨亭叢書 第六十九卷『承空本私家集上』(朝日新聞社、二〇〇二年八月)所収『小野篁集』に拠る。
- (補注2) 崩し字の転載は、児玉幸多『くずし字用例辞典 普及版』(東京堂書店、平成5年3月新装版)一三六頁・一〇六九頁に拠る。
- (補注3) 宮内庁書陵部蔵本の本文の転載は、『小野篁集・篁物語の研究』影印資料・翻刻・校本・対訳・研究・使用文字分析・総索引』(和泉書院、二〇〇一年六月)に拠る。
- (附記) 補注1から3の本文・崩し字等の転載を御許可下さった関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

